

「戦後ゾルゲ団」「第二のゾルゲ事件」の謀略？—米国陸軍情報部(MIS/CIC)1953年「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイルから

1 ゾルゲ・尾崎処刑 70 周年にあたって「上海ゾルゲ団」、戦後情報戦に注目を

● 報告者は、今春『ゾルゲ事件—覆された神話』(平凡社新書)を刊行した。冷戦崩壊後に世界で現れたゾルゲ事件についての新資料・新事実・新研究をトレースし、現段階で残された謎を、改めて提示した。その中心的主張の一つは、ゾルゲ事件とは太平洋戦争前夜、日本特高警察による1941年のリヒアルト・ゾルゲ、尾崎秀実らの逮捕とその後の裁判記録に出てくる日ソ戦回避のための「東京ゾルゲ団」の諜報活動に留まるものではない、ということである。1930-32年末には、「上海ゾルゲ団」があった。事件が知られるようになったのは、日本敗戦後のことである。それも当初は尾崎秀実の反戦平和運動としてであったが、米国占領軍GHQ/G2ウィロビー将軍らが事件を再調査し1949年「ウィロビー報告」を発表、ソ連と国際共産主義運動の陰謀の戦後への継続を大々的に宣伝して、当時の米国マッカーシズムと東西冷戦の情報戦に用いようとした。

その結果、その後のゾルゲ事件の事実解明と研究が冷戦の影を帯びた。米国とソ連の双方から「Intelligenceの必要性」を強調する教材として恣意的に構成され、「20世紀最大のスパイ事件」と語られるまでになった。その副産物として、日本では特高警察が仕掛け米軍が作為した「伊藤律発覚端緒説」が長く通説とされ、また米国・ソ連・日本・ドイツ・中国など当事国のゾルゲ事件への注目点が大きく異なっていて展開した問題を指摘した。

● 今年2014年は、1944年11月7日にゾルゲ・尾崎が死刑に処されて70周年になる。私の『ゾルゲ事件』は、昨年9月上海での国際シンポジウム報告を踏まえたものであったが、今回のシンポジウムでは、中国、ロシアからの専門家を迎え、昨年クローズアップされた1930-32年の上海におけるゾルゲ諜報団の活動が、いっそう明らかになるであろう。私自身は、『ゾルゲ事件』で、上海においてゾルゲに尾崎秀実を紹介したのは、日本の死刑判決文やウィロビーらの言うアグネス・スメドレーではなく米国共産党員鬼頭銀一であったこと、上海におけるゾルゲの活動は、上海のドイツ人ネットワーク、周恩来・潘漢年らの中国共産党中共特科、陳翰笙ら欧州で学んだ中国共産党員によって支えられ、これまで未解明の「上海ゾルゲ団」が重要な役割を果たしたことを述べた。

この点で、今回ロシアから来日するミハイル・アレクセーエフ氏は、現在日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に日本語訳を連載中の『あなたのラムゼイリヒアルト・ゾルゲと中国におけるソ連軍事諜報機関 1930-33』において、ゾルゲが上海

時代にモスクワに送った交信記録・報告類の多くを初めて本格的に紹介・分析し、当時のソ連側のゾルゲ評価を明らかにしたのは、大きな功績である。日本との関わりでは、米国共産党から派遣された鬼頭銀一が「上海ゾルゲ団」の一員であったことがロシア側研究で初めて確認された。

● ただし、上海における鬼頭銀一の役割については、ゾルゲが彼の活動に不満を持ち、満州事変勃発時に鬼頭が日本共産党員木俣豊次の治安維持法違反逃亡幫助で日本の領事館警察に検挙され、ゾルゲがそれに機密漏洩の危機感を抱いた報告は出てくるが、1941年ゾルゲ検挙時の手記を史実として採用し、尾崎の異なる供述と照合していないため、ゾルゲに尾崎を紹介したのは鬼頭ではなくアグネス・スメドレーとされ、尾崎が日本帰国後も大阪・神戸で鬼頭と連絡をとっていた事実が看過されている。また、尾崎とスメドレーの関係についても、もっぱらイレネ・ヴァイデマイヤーの仲介とされているが、尾崎の供述に出てくる陳翰笙の役割も検証する必要がある。「唯一の生き残り証人」川合貞吉の証言の信憑性については、本日報告する渡部富哉氏をはじめ、日本で全面的な再検討が始まっている。周恩来・潘漢年ら中共中央特科との関係、李立山路線、顧順章事件、ヌーラン事件との関わり等は、今回報告する蔵志軍教授ら中国側の研究と史資料、英米諜報機関の上海租界工部局史料との照合が必要になるであろう。本シンポジウムが、「上海ゾルゲ団」についての新たな研究の飛躍点になることを期待する。

2 シベリア抑留帰還者に対する米軍 CIC 尋問記録から

● 今回の私の報告は、実在した「上海ゾルゲ団」「東京ゾルゲ団」の延長上で、マッカーシズム最盛期の米国陸軍諜報部が、戦後日本で再建されたゾルゲ事件元被告らのネットワーク＝「戦後ゾルゲ団」を想定し、フレームアップしようとしていた形跡があることを、今夏米国国立公文書館で発掘した新資料にもとづき、問題提起してみたい。

私のゾルゲ事件研究は、もともと旧ソ連で粛清された日本人犠牲者発掘や戦中・戦後の日独関係・日米関係研究の副産物で、必要に応じて世界の公文書館で収集してきた第一次史資料によるものであるが、今回も、旧ソ連における日本人戦争捕虜の強制労働、いわゆるシベリア抑留帰還者をめぐる米ソ情報戦の研究の中で、新たに見出したものである。

● 2014年8月の私の米国国立公文書館調査は、主要にはシベリア抑留帰還者に対する舞鶴港などでの米軍 CIC（対敵防諜部隊）の尋問記録（1946-50）に集中した。予想通り、米国側資料は充実していた。陸軍情報部の対敵防諜部隊 CIC が主として作成した個人監視ファイル（IRR Personal Files）全 885 ボックス中 370 ボックスしかみられなかったが、約 300 人分の抑留帰還者尋問記録を集めることができた。これまで無名の人々故に収集を先送りしてきた日本人記録約 1800 人分中の 9 割は、尋問原票を含む抑留帰還者の監視記録であることが判明した。それも、抑留記録の無差別収集ではなく、旧特務機関・諜報関係者、民主運動・日本新聞関係者、少しでもロシア語のわかるもの、通訳・翻訳に従事したものが「Project Stitch（縫い物作戦）」の Category A とされたファイルで、ほとんど

に「PSA (Possible Soviet Agent , ソ連エージェントの可能性)」と記され、帰国後も長く監視されていることがわかった。

● また、NHK 樺太局アナウンサー石坂幸子ら樺太・千島からの引揚者は、抑留経験がなくても、密航などソ連事情に詳しいとして、PSA にカテゴリー化されていた。舞鶴・函館港などでの CIC 尋問・嘘発見器の定型マニュアルのほか、抑留帰還者で後の愛知大学教授(ソ連法)胡麻本篤一のように「二重スパイ」として特別監視されている記録もあった。米軍への提出のため未公開の抑留帰還者体験記・手記類も多数収集できた。

これらをもとに米軍が解析した RG319「Project Stitch」総括報告書は、1999-2000 年に名越健郎氏(当時時事通信ワシントン支局長)により紹介されており(資料7)、加藤も既に一昨年 Impersonal Files として収集済みである。ただし、ソ連・中国・朝鮮の戦略爆撃目標設定のための、米国空軍による地誌情報収集尋問の記録、RG341「Project Wringer＝絞り作戦」ファイルは、およそ1万人分があると思われるが、サンプル調査を試みた段階である。

シベリア抑留帰還者以外でも、敗戦時外務省調査局長法華津孝太の反米発言の内部告発による公職追放の記録があり、ゾルゲ事件関連では、満鉄奉天鉄道総局で尾崎秀実に関東軍の抗戦力を教えたとして逮捕されたが不起訴になった後藤憲章が、総理府統計局の経済統計学者になった戦後も「ゾルゲ事件の生き残り」として追跡調査されていた。

『ゾルゲ事件』で述べたように、占領期の米国陸軍情報機関(ウィロビー将軍の GHQ・G2、キャノン機関など)は、尾崎秀実・宮城與徳関係の情報を死後も幅広く集めていたほか、敗戦直後に釈放されたマックス・クラウゼン、元被告川合貞吉、秋山幸治、山名正實、田口右源太らの個人ファイルを作って監視していた。川合ファイルからは、彼が1949年2月米国陸軍のウィロビー報告発表直後から、米軍から月2万円の報酬を得てゾルゲ事件と日本共産党内部情報の提供者になっていたことが判明した。日本の特高警察記録に出てこない、戦前ドイツ連合通信 DNB 東京支局石島栄もゾルゲ事件関係者としてファイルされていた。旧満鉄調査部関係者では、中西功、宮西義雄、安藤次郎らも、同様に米軍の監視下にあった。

3 「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイル中に「戦後ゾルゲ団」を想定した謀略

● 今回とりあげるのは、シベリア抑留にも関連した「第二のゾルゲ事件」「戦後ゾルゲ団」ともいうべき大がかりなフレームアップが、サンフランシスコ講和後、朝鮮戦争末期の1953年1-8月頃、具体的に密偵され企図されていた事実である。ちょうど国会での鹿地亘・三橋正雄事件審議と平行し、ラストボロフ事件の直前における、200人に及ぶソ連スパイ団摘発工作である。中心人物「Ito Masao (伊藤雅夫)」自身が、ゾルゲ事件関係者と想定されていた。しかもそこに、田口右源太、山名正實という戦後釈放されたゾルゲ事件被告、日本側資料にはないが米国側がゾルゲ事件関係者と疑った元 DNB 記者石島栄(高田信二『「ゾルゲ事件」——70年間誰も知らなかった謎の人物・石島栄』、日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第35号、2012/12参照)が関わったとされた。アメリカでウィロビー報告がまとめられ、その福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌』(東西南

北社、1953) 刊行時で、対ソ情報戦に使えると判断されたものだろう。

● 問題の資料は、米軍CIC収集の「伊藤雅夫とその仲間たち(Ito, Masao and Associates)」という全5冊約600頁の大きなファイルで、シベリア抑留帰還者とも関係する。1953年2月26日CIC報告に、「伊藤雅夫は1941年11月29日にゾルゲ諜報団との関わりで検挙され拘留後釈放された」が、戦時中ローブ販売業(検挙時田口右源太も同業)、戦後は在日ソ連代表部イワノフ陸軍大佐の専任運転手で対日諜報に従事、とある(資料1・資料5)。

これがファイルされた理由は、伊藤情報中に「1953年1月13-20日に全国在日ソ連諜報員会議が開かれた」という情報があったため、そこから全国的な該当者・候補者調査が始まり、全体総括図(資料2)のような、全国200人規模の一大ソ連スパイ団があると想定され、独立直後の日本警察による摘発が検討された。

中心人物は、樺太出身で、日本敗戦時に朝鮮半島に連行され、朝鮮・平壤の抑留収容所で諜報訓練を受けたという伊藤雅夫のほか、伊藤と戦前樺太でつながる北海道のソ連スパイ今福太郎(札幌・北海秘密探偵社)、樋口義郎(元樺太新聞記者、郷土誌『帯広・十勝』編集長)、それに、ゾルゲ事件元被告田口右源太(戦後共産党十勝地区委員長など)、の4人とされている(資料2・資料3)。

その背後に、日本共産党北海道委員会西館仁ら、密航船第一喜勢丸(飯塚一夫船長)ら漁業・船員関係者(樺太・千島・朝鮮への密航)、抑留引揚者団体(ソ連、樺太・千島、朝鮮)、朝鮮戦争中の在日朝鮮人運動(朝鮮青年行動隊)、中国共産党との連絡網があり、資金提供の財源及びカバーとして、札幌の佐々木組(佐々木清)、函館の阿部組(阿部鶴松)、国策パルプ(戦前共産党「転向」者の水野成夫・南喜一らの製紙会社、「青木貞吉」が田口右源太に資金援助と出てくるが、田口と同じくゾルゲ事件被告とあるので「川合貞吉」の可能性が強い、資料4)、神戸新開地の福寿公司、神戸博愛病院(華僑の鄭義雄創設)などがあげられた。

関係者として、田口右源太の線から山名正實(戦前は三田村四郎・久津見房子夫妻のもとで共産党・農民運動、占領期に共産党初の女性国会議員で同じくゾルゲ事件で検挙された柄沢とし子=武田とし子の夫)、石島栄(戦後共産党北海道委員会農民部長)らゾルゲ事件の生き残り、今福太郎・樋口義郎の線から北海タイムス、札幌新聞、室蘭日報等の記者たち、淡徳三郎ら抑留帰還者、それに、国警東京地方本部作成の全国200人以上の諜報員実名名簿がつながっていると推論され、監視された模様である。ソ連のUB Line工作(資料5)、NO機関、H機関(三国機関、猪俣浩三『占領軍の犯罪』図書出版社、1979にも鹿地・三橋事件がらみで登場)などの工作・機関名も出てくる。つまり、伊藤・田口・山名・柄沢・石島・久津見という6人のゾルゲ事件関係者が、広い意味でのソ連スパイ団の一部として登場する(ただし、私の解説では伊藤雅夫は実際には無関係、後述)。

● 「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイルを読み込むと、米軍対敵防諜部隊CICによるこの調査のきっかけは、1953.1.8に情報提供者(Informant)からもたらされた、1953.1.13-20に全国在日ソ連諜報員会議が、東京以外の各地で、クーリエ(連絡員)のネットワークにより召集され、日本人指導者により、①諜報員の配置、②暗号・コールサイ

ンの変更、③義務的コードサインが決定されるという情報で、この指令は、ソ連から樺太・北海道ルートでもたらされたという(資料1)。この情報の情報源が探られ、中心が「ITO」という人物だということで、当初は抑留帰還者ら何人かの「ITO」が候補として浮上し(共産党潜行幹部・伊藤律は入っていない)、1953.2.26に「伊藤雅夫」と特定された。

その最初の「伊藤雅夫」情報に(資料1)、①1941.11.29 ソルゲ事件で検挙、不起訴保釈、その後ロープ販売業(田口右源太の検挙時職業と同じ)、②1947-49 ソビエト代表部イワノフ大佐の専任運転手、③1952.11に中島かずまさ(別名やたべ・りょういち)から、伊藤雅夫は1952.11.20に北海道根室から樺太に密航し、53.4-5月に日本に戻ってくる予定、樺太から30-40人の非合法グループが日本に入っている、④この樺太グループの中心が、現住所小樽市緑町の今福太郎(こん・ふくたろう)で、本籍樺太・大泊で1915-47 樺太育ち、英語・ロシア語がわかり、1929 札幌新聞社会部ほかジャーナリスト、大泊土建組合、1944 佐々木組に入り、45 かたがわ缶詰工場支配人、大泊興信所を作って樺太在住日本人の密航帰国を組織、その資金は札幌・佐々木組の息子佐々木清から出た、⑤今福太郎の指導者がソ連諜報員の樋口義郎、今と共に北海道秘密探偵社を興した責任者で、元樺太新聞記者・文筆業で郷土誌『帯広・十勝』主筆、以後、この今福太郎と樋口義郎の探索から、この諜報団と日本共産党をつなぐ中心人物として、樋口の帯広・十勝での友人でソルゲ事件元被告田口右源太(53年には横浜で生活協同組合勤務)が浮上、北海道共産党の指導者田口右源太の調査から、50年分裂時の北海道委員長西館仁、田口の友人で同じくソルゲ事件被告だった山名正實(資料6)、農民運動指導者・石島栄(CICはソルゲ事件関係者と認識)にもつながった。

● ただし、田口右源太、山名正實、石島栄ら北海道のソルゲ事件関係者の占領期の動きは、1949.2 ウィロビー報告のために47年頃からCICによりファイルされていたが、1953「伊藤雅夫ファイル」時点では、詳しく参照されていない。したがって、「山名正實ファイル」1950.8.11で、1950年共産党分裂時に山名が「志賀意見書」を暴露した野田弥三郎グループに従い除名された際に山名と離婚したとされる衆議院議員・柄沢とし子(旧姓武田とし子としてソルゲ事件で検挙され不起訴、50年国際派、後に共産党幹部松島治重と結婚)、および、山名の戦前からの同志三田村四郎の妻久津見房子(ソルゲ事件被告)の名は、1953年「伊藤雅夫ファイル」中では直接には登場しない。

「伊藤雅夫」の探求で、彼が北朝鮮抑留中にソ連の工作員として訓練され指令を受けた帰還者として1946.6に日本に帰国したと判明した。ただし、「ソルゲ事件で検挙・不起訴」の履歴情報は次第に消え、41年満州で関東軍入隊、自動車部隊所属、北朝鮮第一人民教習所で諜報訓練など、ソ連・朝鮮との関わりが重視された。ここから朝鮮戦争時の在日朝鮮人運動(朝鮮青年行動隊=祖国防衛隊)、神戸の福寿公司・神戸博愛病院を中継点とした在日華僑と中国共産党との繋がり、在日ソ連代表部のシベリア抑留帰還者を用いた諜報工作、北海道共産党の西館仁らに調査が広がり、総括図のようなネットワークを持つとされた。

その構成員・財源等の情報から、1953.2 国警東京作成の、女性を多数含む怪しげな全国諜報員名簿まで作られ、結びつけられた。国警東京作成諜報員名簿には、HEISO=北朝鮮関係38人、SEMO=ソ連関係56人、CSEM=中共関係26人、YOTE=在日ソ連代表部直轄指

導者7人計127人の住所つき実名リストが出てくるが、その信憑性は薄弱である。これに1952.10作成の所属・住所不明87名の実名リストを加えると214名となるが、この日本人リスト中女性名が70人に近く、朝鮮戦争時のソ連の実践的な対日諜報ネットワークとしては、不自然に思われる。

名越健郎氏によると、米国陸軍諜報部はシベリア抑留帰還者に対する尋問「Stitch Project」によって、ソ連スパイ352人を割り出し、内138人がスパイ工作を受けたと自白し、その中の32人が帰国後ソ連当局から実際に接触を受けたという（Project Stitch 総括文書、1952.12、資料7、参照）。この352人と「伊藤雅夫ファイル」中の214名リストがどれだけ重なるかは定かでないが、米軍は、抑留中の忠誠誓約によるソ連の帰還者工作は帰国後に脱落者が続出して失敗したとみなし、「多くのスパイが活動中止を誓約したり、二重スパイになった」とも述べているので、「戦後ゾルゲ団」は、抑留帰還者を含むが、同時に朝鮮戦争中の在日朝鮮人・中国人、それに、日本共産党員やゾルゲ事件残党により再編成されたものと想定していた、と考えられる（資料5・資料7）。

4 米軍エージェント川合貞吉と山名正實を使った田口右源太への「二重スパイ」工作？

● 重要なのは、田口右源太の活動資金調査で、1952.11に国策パルプ（水野成夫・南喜一）が「青木貞吉」を通じて田口に資金援助を与えた、という情報が「伊藤雅夫ファイル」にあることである。そこでは「田口と青木は戦争中ゾルゲ・スパイ団として共に長く獄中、戦後釈放」とされており（資料4）、この「青木貞吉」は、元日本共産党幹部で「転向」した水野成夫・南喜一が作り、旭川に工場を持つ国策パルプとつながる「川合貞吉」のことと思われる。

拙著『ゾルゲ事件』で詳述したように、川合貞吉は、1949年2月にはウィロビー、キャノン機関のエージェントとなっている。そのため米軍記録には「青木」と偽名で記録されたとも考えられ、田口・山名ら他のゾルゲ事件関係者・共産党員を「二重スパイ」にするための工作に、川合貞吉と国策パルプ、三田村四郎の反共労働工作が関わったことを示唆している。コミンフォルム批判による日本共産党の50年分裂は、ソ連KGB・GRUにとっても、米国G2・CIAにとっても、「日本人スパイ」「二重スパイ」獲得の絶好の機会であった。

● CIC「山名正實ファイル」には、ゾルゲ事件元被告の山名正實を、1947年9月29日にCID（民間検閲局）のマスター監視リストに移し、「ゾルゲ事件」残党として本格的監視下におく記録がある。これは、『ゾルゲ事件』で述べた「川合貞吉ファイル」の場合と全く同時で、G2のウィロビー、キャノン機関が、山名を米軍エージェントにする可能性を探っていたと考えられる。ただし山名は、川合とは異なり上海での活動歴がないため、49年2月ウィロビー報告発表時には、ゾルゲ・尾崎・スメドレー会談を証言できると称した川合の場合のような、露骨なエージェント工作を受けることはなかった。また、この時点で川合と山名が連絡をとった形跡はなく、双方の個人ファイルに相手の名は出てこない。

ゾルゲ事件被告山名正實は、戦前からの北海道農民運動の活動家で、三田村四郎（獄中転向幹部）・久津見房子（ゾルゲ事件被告）夫妻に近かったが、45年釈放後は、北海道で

田口右源太・石島栄らと共に共産党再建に加わり、共産党初の女性国会議員柄沢とし子（ゾルゲ事件で検挙・不起訴となった旧姓武田とし子）の夫となっていた。

だが、コミンフォルムによる日本共産党批判で同党が分裂すると、山名は50年5月に野田弥三郎らの「国際派」に加わったとして除名された、と米軍は記録している。同じく「国際派」だが、宮川寅雄に近い柄沢とし子とはその頃離婚した（柄沢は55年六全協で共産党に復帰、幹部の松島治重と再々婚）。CICによれば、二人の離婚は党路線の違いによるもので、以後、山名は復党することなく、もともと入党推薦者であった三田村四郎の反共組織「三田村労研」に加わった（平沢是広『汚名——ゾルゲ事件と北海道』北海道新聞社、1987、荒井英二「わが地方の進歩と革命の伝統：北海道」『前衛』1973/4）。

1953年時点での山名正實は、国策パルプ（水野成夫・南喜一）及び三田村四郎を介して、すでにG2/CIA エージェントとなった川合貞吉と結びつく可能性があり、CICが川合の本名を隠した「青木」名での田口右源太への資金援助情報（資料4）は、水野・南・三田村をスポンサーにした川合貞吉と山名正實の合作による、同じゾルゲ事件被告田口右源太の「二重スパイ」抱き込み工作があったとも考えられる。

しかし、田口右源太は、真面目な共産党活動家で、米軍・内閣調査室・公安調査庁（の日本人エージェント）の誘いにはのらなかった。六全協を機に共産党を離れたが、横浜の生活協同組合運動から出発してビジネスマンとして成功し、「戦後ゾルゲ団」にも関わらず、三田村・山名グループにも加わらなかった（平沢『汚名』）。田口・山名と戦後農民運動で一緒だった石島栄は、六全協後も共産党に忠実で、上京して洋書販売ナウカ社の役員になる（前掲高田信二論文）。

なお、山名正実の50年党分裂後の軌跡＝三田村四郎・川合貞吉への接近の有力な傍証として、1954.9.27 日本共産党による「神山茂夫除名決定書」があり、信憑性は定かでないが、神山派と児玉誉志夫・遠山景久を介した川合・山名・三田村四郎の繋がりが出ている（法政大学大原社会問題研究所『日本労働年鑑』第28集、1956年版）。

<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/28/rn1956-783.html>

● ただし、この事件の中心人物「伊藤雅夫」情報自体が曖昧で、履歴情報が数種類あり、現住所も不明とされている。当初の「ゾルゲ事件で1941.11.29 検挙」（みずず『現代史資料』等の記録には該当者なし）という履歴（資料1）は途中で消えて、戦時は満州で関東軍勤務、トラック運転手、などの異なる情報が出てくる。「伊藤雅夫ファイル」中で共通する情報は、樺太出身、戦後朝鮮半島で抑留、対日諜報訓練を受けて後46.6 帰国、ソ連代表部専任運転手、というもののだが、実際にはゾルゲ事件とは無関係で、全国組織の大物幹部であったというのも疑わしい。1953年9月には、この大規模スパイ団の情報は、断片的情報の積み上げのみで信憑性に疑問があるというCIC内の内部意見も出てくる。現在の所、「上海ゾルゲ団」「東京ゾルゲ団」の後継の「戦後ゾルゲ団」と想定されたが、証拠不十分でフレームアップできなかった「第二のゾルゲ事件」だった可能性が大である。また、これまで私が収集した田口右源太、山名正實、石島栄、淡徳三郎らの個人ファイルには、1953年のこの事件は出ておらず、「伊藤雅夫ファイル」には伊藤律や白鳥事件関係者の名前も出てこない。

● いうまでもなく、この時期は、東西冷戦、中国革命・朝鮮戦争、米国マッカーシズム、ソ連スターリン没・水爆実験、日本の独立・再軍備・保守合同、それに日本共産党の50年分裂・暴力革命・中核自衛隊・山村工作隊・トラック部隊・人民艦隊の時期で、春名幹男『秘密のファイル』（新潮文庫）に出てくるように、米国の対日諜報では、マッカーサー解任、サンフランシスコ講和条約に伴い、GHQ・G2 ウィロビー、キャノン機関から、CIA 極東支局に主導権が移る時期である。東西冷戦は、日本国内でも、米ソ双方から多くの謀略・スパイ工作を生んでいた。松本清張、吉原公三郎、大野達三らが好んで描く「日本の黒い霧」の舞台である。

● 北海道は、対ソ諜報の最前線でゾルゲ事件関係者も多く（平沢是広『汚名——ゾルゲ事件と北海道』北海道新聞社、1987）、白鳥事件、関三次郎事件等反共・密航船がらみの謀略も渦巻いていた。北海道CIC責任者で辣腕をふるい、下山事件関連でも顔を出すジョージ・カーゲットがウィロビーのG2からCIA文書調査部に移る時期であり、延禎『キャノン機関からの証言』（番町書房、1973）が挙げる様々な工作があった。毎日新聞旭川支局記者佐藤哲朗『北海道戦後謀略史の証言』上下（太陽、1979）、北海道新聞記者小池洋右『潜行——米ソ情報戦と道産子科学者』（北海道新聞社、1997）、同『日本人狩り——米ソ情報戦がスパイにした男たち』（新潮社、2000）等が系統的に追跡してきた問題で、白鳥事件のからみで今西一教授、手島繁一・慶子夫妻がインタビューしてきた世界と重なる（「水落恒彦氏に聞く(1) (2)」聞き手＝今西一、手島繁一、手島慶子、小樽商科大学『人文研究』第124・126号、2012/2013）。

● 「伊藤雅夫ファイル」中の1952年10月CIC報告によると、ソ連が当初企図したシベリア抑留帰還者中心のUB Line 工作は、抑留時の忠誠誓約を破って帰国後脱落するケースが続出し、新たに在日朝鮮人をも含めた諜報網を再構築しようとしているとあり、そのグループ再編を「伊藤雅夫とその仲間たち」として追及したものと思われる。それに田口右源太、山名正實、石島栄らの名も出てきたので、「第二のゾルゲ事件」「戦後ゾルゲ団」の網をかけようとしたが、独立したばかりの日本の法体系では立件が難しく、日本の警察に起訴を委ねることを断念、そこに当時緊要の「スパイ防止法」立法化のために使える53年8月稚内の関三次郎・クリコフ事件（ソ連監視船拿捕から発覚、CIC「関三次郎ファイル」には外事警察資料第1巻第2号「関三次郎及びP・K1403事件」という1955年警察庁警備部作成報告書が入っている）、在日ソ連代表部関係から追った54年1月ラストボロフ事件（警視庁公安部作成「部外秘 外事警察資料」1969/4には、ソ連代表部KGB要員ラストボロフが米国CIAに寝返ったさいに供述したという日本人エージェント36人の実名があるが、そのうち半分近くのCIC個人ファイルがIRRに入っている）が発覚し、より権力中枢に食い込んだソ連スパイ事件として、対ソ諜報のターゲットをそちらに移したと推定できる。

5 おわりに――ゾルゲ・尾崎秀実が夢見た「スパイ」が死語となる世界

● 以上の「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイルの暫定解説から分かることは、第一に、米国陸軍情報部は、1952年4月のサンフランシスコ講和条約による日本の独立後も、日本、特に北海道を「ソ連スパイ」の潜入先と見なし、占領期の要注意人物監視ファイルを保存し再ファイルして、多くの無名の人々を含む日本人の監視を継続していたことである。しかも、その米軍の諜報活動に、1953年頃にはCIAも加わる。日本の国家警察・内閣調査室等も協力し、手足として使われており、ことインテリジェンス・防諜戦に関する限り、日本の独立は無きに等しかった。米軍による日本人サーヴェイランスとファイリングは、占領が終わっても米軍基地内のCICによって続けられ、沖縄・本土に米軍基地は残されているから、今日まで続いていると考えられる。

● 第二に、ソ連の対日諜報活動は、70年前のゾルゲ・尾崎秀実の処刑後も、実際に続いていた。特に敗戦時の戦争捕虜名目でのシベリア等全土への日本人抑留者60万人には、過酷な強制労働、『日本新聞』、『民主化運動』によるイデオロギー的洗脳のみならず、郵船帰国の利益誘導によるスパイ工作が行われた。それは、ドイツ人捕虜240万人、ハンガリー人50万人の中からの選抜者による東欧共産主義政権樹立要員工作と並んで、ソ連赤軍・KGBによる大規模な冷戦型インテリジェンス活動を意味した。ただし日本人捕虜の場合、帰国（ダモイ）のためにやむなくスターリンへの忠誠を誓う面従腹背がほとんどで、帰国後の「脱落者」が多く、実際にソ連とマルクス主義を信じ、日本共産党員またはソ連の対日・対米諜報員として活動するケースは希であった。

その抑留帰還者「脱落」には、帰国時の米軍による嘘発見器を使った容赦なき尋問・監視、帰国した日本での郷里・家族・求職による「抑留帰還者＝アカ」という差別・抑圧と、ソ連「社会主義」の真実を実体験で知った帰国者たちの家庭や職場での証言が、大きな役割を果たした。そのため、鹿地亘監禁事件の証言者三橋正雄、ソ連代表部員ラストボロフとその日本人エージェント（多くが抑留帰還者）のように、ゾルゲや尾崎秀実に匹敵する、強固な思想に裏付けられた「スパイ」協力者を産み出すことができず、せいぜい、野坂参三のような共産党内の風見鶏エージェントを作るにとどまった。

ただし、上海でのゾルゲの助手で、ソ連の核開発に大きな役割を果たしたウルズラ・クチンスキー（ハンブルガー夫人、党名ソーニャ、マンハッタン計画の原爆スパイ＝クラウス・フックスを英国で獲得）や、ラストボロフ事件に関与した外務省の泉顯蔵（日ソ中立条約締結に直接関与）が、今日「ゾルゲ以上のソ連スパイ」と評されるように、「事件」として表面化し検挙されなかったソ連諜報員が存在した可能性も否定できない。レフチェンコ事件（1979）の際は、自民党石田博英労相、社会党勝間田清一委員長らの名も「KGBエージェント」として名を挙げられた。

● 第三に、ゾルゲ事件は、冷戦期の諜報合戦のなかで、主として米国陸軍情報部ウィロビー將軍らにより「20世紀最大のスパイ事件」に仕立て上げられ、そのイメージが一人歩きしていった。日本共産党が「伊藤律スパイ説」などでそれを裏側から補強し、ソ連が1964

年にゾルゲを公式に「大祖国戦争勝利の英雄」と認めまつり上げるにより、国際的に認知された。戦後初期に尾崎秀実の獄中書簡『愛情はふる星の如く』がベストセラーになったような、情報・言説を駆使しての反戦平和のための抵抗イメージは後景に退いた。

冷戦下で米ソの諜報活動が明るみに出ると、それがゾルゲ事件に比べてどこまで権力に肉薄していたか、どのような暗号・連絡手段を用い、どれだけ情報戦に役立ったかが問題になり、その都度ゾルゲ事件が一つの引照点とされた。イギリスのプロヒューモ事件（1962）、西ドイツのギョーム事件（1974）、アメリカ CIA の原発導入正力松太郎工作や自民党への資金供与、等々が、今日では知られている。

ただし、グローバル化やインターネットの普及で、情報戦がエシュロンやウィキリークス、スノーデン告発の水準に達すると、ゾルゲ・尾崎のような個人の役割（ヒューミント）や思想的使命感の意義は、希釈された。21 世紀に入ると、ビッグデータの収集・解析や IT 技術開発、軍事力・経済力に加えて外交・文化のソフトパワーが重要になった。私がアントニオ・グラムシに学んで、「19 世紀機動戦・街頭戦、20 世紀陣地戦・組織戦から、21 世紀は情報戦・言説戦の時代へ」と提唱するのはこのような意味であるが、巨大国家の情報独占・情報操作に対して、民衆がどのように個人の人權、言論・思想の自由、立憲主義と熟慮民主主義を立脚点として対抗し、スパイや謀略の必要のないグローバルな市民社会、民族や宗教を超えた平和を構築するかが問題になる。

本報告で分析した米国陸軍情報部の対敵防諜部隊 CIC は、Counter Intelligence Corps の略語で、敵国のスパイ摘発を主たる任務としたが、今日では別の意味で、国家機密や戦争勢力の企図を暴き出す、民衆的 Intelligence、情報公開のための Counter Intelligence が必要になる。リヒアルト・ゾルゲや尾崎秀実は、戦争回避・世界平和を求めて情報戦に加わり、70 年前に処刑された。彼らの活動を支えた信念は、国境のない世界共和国の夢だった。没後 100 年を迎える 21 世紀半ばには、「スパイ」という職業や言葉が無意味になるような世界を展望し、期待していたに違いない。

DECLASSIFIED

Authority: NND 007017

資料1-伊藤雅夫

SECRET

26 February 1953

MEMORANDUM

SUBJECT: ITO, Masao and Associates

1. ITO, Masao, Japanese, was reported arrested on 29 November 1941, in connection with the Sorge Spy Ring and released in custody. His age was then listed as forty and occupation as dealing in rope materials.
2. Ito, Masao was also the personal chauffeur of Lt Col Ivanov, formerly of the Soviet Mission, from 1947 to 1949.
3. Ito, Masao is reported by Confidential Informant to have stated that meetings of the national organization of Soviet intelligence in Japan were scheduled for the period 13 to 20 January 1953. Location of the meetings was unknown, but it was believed that most of the meetings were to be held outside of Tokyo proper. The meetings were not to be held at one place, but simultaneously in several locations to prevent large groups at the meetings. The members attending the meetings were to be notified in letter by courier. Three members of each district were to participate in the meetings. It was expected that personnel of the former Soviet Mission would be present, but the meetings were to be conducted by Japanese leaders. The topics for discussion were: Disposition of personnel; Changes in codes and call signs and Duty code signs. Recent policy has been to import agents for the organization directly from Soviet territory. One of the principal routes is the Karafuto-Hokkaido route. Members of the former Soviet Mission are presently reported very active in establishing contact with their informants, usually between 1700 and 2100 hours.
4. In November 1952, KAKITA, Kazumasa, also known as (YATABE, Kyoichi), Japanese (U), contacted Ito, Masao at the prison and related that he will leave for Esotoru, Karafuto on or about 20 November 1952 from Nemuro, Hokkaido. Wakajima believed that he may return to Japan sometime in March or April 1953 and that upon his return, a group of about 30 or 40 men will illegally enter Japan from Karafuto.

5. As of 11 February 1953, the following information was made available per A/R dtd 11 Feb 53, 441-201682 (2), RVI-1440 (2).

KON, Fukutaro Japanese (KM-CP), DOB approx 1895, Honseki: Minami 3-chome, Nishi 1 Jo, Honcho, Otomari (XG3665), Karafuto. Address as of 1950: 2 chome, 29 banchi, Midori-cho, Otaru-shi, Hokkaido. Studied English in school, speaks and understands a minimum of Russian. Spent extended periods of time in Karafuto between 1915 and 1947. Visited Pusan, Korea in early May 1944. Married. Wife's name Takeo, Meiji (approx DOB 1906). Has four children. Has about 27 close friends and associates in Hokkaido.

Between 1915 and 1929 he worked for a paper mill and several newspapers. In 1929 worked for the Social Section of the Sapporo Shimbun and in August of that year became director of the Otomari Contractors League. In 1944 joined the Sasaki Gumi, a contractors' association. In 1945 became office manager of the Katagawa Cannery.

In 1945 he became one of the officials of Koshin Jo in Otomari ostensibly to assist the Japanese remaining in Karafuto, but the mission is reported to have been to gather information on the thoughts and actions of the Japanese civilians and to report the names and locations of ex-Japanese police and military personnel.

Kon, Fukutaro is reported to have extorted money from the Japanese with the promise that he would use his influence with the Russians to get them repatriated sooner. He himself repatriated on 3 January 1947, but before his repatriation he was reported

1941.11.29
ソリヤ事件で検挙後
釈放

1953.1.13~20
在日ソ連諜報員
会議開催

今福太郎

NOV 1953

SECRET

SECURITY INFORMATION

7

SECRET

SECURITY INFORMATION

[伊藤雅夫とその仲間たち]

ITO, MASAO AND ASSOCIATES

10 Oct 52

771-507632

Diagram Showing the Route used to smuggle agents to Japan, various contact points, and the name of the person in charge of the contact point.

Reproduced from the Unclassified / Declassified Holdings of the National Archives

DECLASSIFIED

Authority NND 007017

SECRET

SECURITY INFORMATION

Pyongyang First Training Center

Ham-Fung Second Training Center

Haiju Third Training Center

Wonsan (元山)

Haiju (海州)

Yosu (麗水)

Moroyose (諸葛) (Ryogo)

Kunsan (群山)

Japan Carbide Co., Utsu, Toyama-ken
(富山県魚津市カーバイド富山工場)

Saikai Island, Senzaki Port, Yamaguchi-ken
(山口県仙崎港青島)

Orders from Soviet Mission Official (formerly Ivanov)
[在日ソ連代表部 1917]

Y.O.T.E., Shinkaiichi, Kobe-shi
[神戸新開地 福寿閣 神戸博愛病院]

[福岡] Ishiyama, (fnn) (石山), operator of "pachinko" shop in Onohama, Fukushima-ken. Leader of Tohoku Sub-District (Tohoku Bunku)

Sakamoto Hotel (Sakamoto Ryokan), Hiroshima-shi. Operated by a Korean Kin, (fnn) (金). Boku, (fnn) (朴) lodges with Kin.

Hakodate, Hokkaido. Nishidate, Jin (西館仁) (RM-CP)

Kagoshima (location of contact address unknown)

[札幌]

Kushiro, Hokkaido. Taguchi, Ugenta (田口名塚太) (RM-CP) Connected with Sorge Incident.

[樺太]

Namuro, Hokkaido. Ken, Fukutaro (今 福太郎) (RM-CP) Higuchi, Yoshio (樋口義男) (RM-CP)

Nosappn, Hokkaido

Soviet Union

Note: Haiju-Kunsan route used principally by Korean agents. Wonsan-Yosu and Wonsan-Moroyose routes used principally by Japanese agents.

SECRET

SECURITY INFORMATION

山名正實 (ソルゲ事件被告) — 柄沢 (旧姓武田) とし子 (ソルゲ事件で検挙・不起訴)

三田村四郎 (三田村芳研) — 久津見房子 (ソルゲ事件被告)

国策パルプ (水野成夫・南喜一) — 「青木」こと川合貞吉 (ソルゲ事件被告) ?

石島栄 (戦前ドイツ通信記者—ソルゲと親交、戦後北海道で農民運動)

資料2

総括図

[伊藤雅夫]

[福岡]

[札幌]

[樺太]

戦後ソルゲ事件?

DECLASSIFIED

Authority NNJ007017

資料3

AGENT REPORT

1. Name of Subject or Title of Incident

ITO, MASAO AND ASSOCIATES

2. Date Submitted

9 April 1953

3. Control Symbol or File No.

441-201682 (2)
RVI-1440 (2)

4. Report of Findings

In connection with the alleged courier route between Eastern Hokkaido and the Kurile Islands, source indicated that the following persons are under investigation or suspicion by the MSA:

Kon, Fukutaro // (今福太郎); Japanese; Known Communist Member; Approx DOB 1895; MSA; address unknown//.

Taguchi, Ugenta // (田口右原太); Japanese; Known Communist Member; DOB: 16 July 1903; male; present address believed to be Yokohama-shi//.

Higuchi, Yoshiro // (樋口義郎); Japanese; Known Communist Member; DOB: 3 March 1916; male; South 15-chome, West 15-jo, Obihiro-shi, Hokkaido//.

Yokoyama, Kazuhiko // (横山和彦); Japanese; Important Communist Member; DOB: 1 May 1925; 3-banchi, 4-chome, Aza Matsumoto-cho, Nemuro-machi, Nemuro-gun, Hokkaido; Chairman, Nemuro District Committee, Japan Communist Party (Nihon Kyosanto)(JCP)//.

Kusagae, Yoichiro // (草薺与一郎); Japanese; Important Communist Member; DOB: 14 September 1926; male; 3-banchi, 1-chome, Matsumoto-cho, Nemuro-machi, Nemuro-gun, Hokkaido; Responsible Person, Nemuro Cell, Nemuro District Committee, JCP; Member, Standing Committee, Kushiro Committee, JCP//.

Kamido, Goro // (上出五郎); Japanese; Known Communist Member; DOB: 25 June 1925; male; Aza Izumigawa Genya, Oaza Atsubetsu-mura, Bekkai-mura, Nokke-gun, Hokkaido (CV 6205); Responsible Person, Izumigawa Cell, Nemuro District Committee, JCP//.

Hayashi, Kunio // (早矢仕邦夫); Japanese; Probable Communist Member; Approx DOB 1925; Izumigawa Genya, Bekkai-mura, Nokke-gun, Hokkaido; Member, Standing Committee, Kushiro Committee, JCP; Responsible Person for distribution of party organ in the Kushiro area//.

Muraoka, Tokuji // (村岡徳治); Japanese; Suspected Communist Sympathizer; DOB: 10 April 1880; male; 3-banchi, 9-chome, Aza Hanazono-cho, Nemuro-machi, Nemuro-gun, Hokkaido; Muraoka's residence is used as a mail and parcel drop for the Nemuro District Committee//.

05091

5. Name and Organization of S/A
TSUMORI ISHIMOTO, Crawford F/O
Region VI, 441st CIC Detachment

6. Signature of S/A

Tsumori Ishimoto

CI-R-00568

Agent Authority Information:

27

(木野成夫 南署一)

国策1967

青本=146点±?

資料4

(On 25 November 1952) it was reported that the National Pulp Company, Limited (Kokumoku Pappu KK) (国木口パルプ株式会社) (Japanese), has been giving financial aid to Taguchi, Ugenta, who along with Aoki, Sadakatsu (青木 貞次郎) (Japanese) (Suspected Communist Member) (DOB unknown) (Address unknown) received a twenty (20) year prison sentence for participation in the Sorge Spy Ring (both were released during the early days of the occupation of Japan). Taguchi, Ugenta is presently a courier for the Democratic Labor News Agency (Minro Tsushin) (民労通信社) (Japanese), Obihiro-shi, Hokkaido; and travels from Obihiro-shi to Sapporo-shi, Hokkaido. On these trips Taguchi, Ugenta contacts the Hokkaido Regional Headquarters of the JCP which is located at North 2 jo, East 3 chome, Sapporo-shi, Hokkaido.(7-6)

DECLASSIFIED

Authority NND007017

SECURITY INFORMATION

SECRET

23490

P/CLK

98742

AGENT REPORT

WBJ/th

1. NAME OF SUBJECT OR TITLE OF INCIDENT

ITO, MASAO AND ASSOCIATES

2. DATE SUBMITTED

10 OCT 1952

3. CONTROL SYMBOL OR FILE NO.

441-201682 (2)

CE

4. REPORT OF FINDINGS

On 2 Oct 52, the following information was obtained from Confidential Informant IV-616:

ITO, Masao (伊藤 雅夫) (Japanese) (U) smuggled into Japan on 18 Jun 46, via Pyongyang, Haifu, Incheon, Kunsan, Yosu and Sakai Island (新島) (located outside Samsaki Port in Yamaguchi-ken, Japan), along with 27 other persons on board a wooden, diesel-powered fishing vessel (name unknown) of Korean registry. The boat was captained by a Korean national. When the fishing vessel approached Sakai Island outside Samsaki Port, a sampán, which came out to greet it, guided it to a point along the coast of Yamaguchi-ken. Here the illegal entrants disembarked and were led to fishermen's homes by guides waiting at the place of landing. ITO stayed for about one week in the home of a certain Fumada, Giichi (田田 幸一) (nationality unknown) (U), near Samsaki, and then proceeded to Hiroshima and Tokyo after making a stop-over in Kobe. HE was employed as a driver by the Soviet Mission until around Nov 46, when HE was discharged.

While in Korea, ITO received training at the First People's Training Center (Daitchi Jimin Kyoshu Sho) (第一人民教育所), an Intelligence School, under the tutelage of a certain Ivanov, (fnm) who was formerly superintendent of the First People's Training Center and, as a member of the Soviet Mission in Tokyo, later became the leader of an alleged Soviet Intelligence Apparatus in Japan. Ivanov was one of the twenty-four (24) Soviet Mission Staff members who recently departed from Japan for the Soviet Union. Ivanov also operated under the name of Yun (phonetic) while in Japan.

The following is ITO's account of the mission and organization of the Soviet Intelligence Apparatus in Japan which is referred to as the "U.S. Line Operations" (U.S. Sen Kosen) (U.S. 線工作) (Note: U.S. may possibly be N.B.). The meaning of "U.S." or "N.B." has not yet been determined.

This secret intelligence apparatus is an organ established by the Soviet Union to maintain surveillance over Soviet espionage agents in Japan. It is composed of Japanese and Korean agents trained specifically for that job in North Korea and infiltrated into Japan. Originally, the Soviets had attempted to organize the so-called U.S. Line Operations centering around the Soviet-indoctrinated repatriates who were returned to Japan, but it was soon learned that these could not be relied upon to carry out their mission since many among them betrayed the Soviet Union once they got foot on Japanese soil. The need was felt for recruitment of secret agents of stronger fibre. During the first four months in 1950, three classes of youthful Korean recruits were trained in or around Osaka under the supervision of a certain North Korean Colonel and a former commander of a Japanese Army Tank Regiment in Mukden by the name of Capt Komine, Yusaburo (小堀 友三郎) (Japanese) (U). Each class consisted of 200

5. TYPED NAME AND ORGANIZATION OF SPECIAL AGENT

KHE-BENG W. CHIONG, Arsenal Area F/O
Region IV, 441st CID Det

6. REPORT OF FINDINGS

Richard J. Conolly
/s/ Khe-Beng W. Chiong

WD AGO FORM 341

SECRET

SECURITY INFORMATION

SECURITY INFORMATION

SECRET

1. NAME OF SUBJECT OR TITLE OF INCIDENT

ITO, MASAO AND ASSOCIATES

2. DATE SUBMITTED

30 December 1952

3. CONTROL SYMBOL OR FILE NO.

441-201682 (2)

NYL-1440 (2)

4. REPORT OF FINDINGS

On 27 March 1948, it was reported that Nishimura, Hajime (西村 健) (Japanese) (Political affiliation unknown) (DOB unknown) (Osaka-cho, Yachi-no-machi) frequently contacts Taguchi, Ueno who was formerly connected with the Sorge Spy Ring.

In February 1948, it was reported that Taguchi, Ueno and Yamano, Harumi (山野 春見) (Japanese) (Former Communist Member) (Approx DOB 1913) (Osaka-cho, Yachi-no-machi, Yachi-no-machi, Hiroshima-cho, Hiroshima-cho, Hiroshima-cho, Hiroshima-cho) have been visiting Aka, Tsumanatsu (赤 辰丸辰夫) (Japanese) (Hsuan Member Japan Communist Party) (DOB 8 April 1901) (Osaka 22, West 2, Sapporo-cho, Hokkaido) (S-3)

Detainee

【名義健郎の20世紀アーカイブス】(1) シベリア抑留 GHQ、全土でソ連スパイ狩り



六年に及んだ連合軍司令部(GH
Q)の日本占領期、軍事的に勢力を日本を
つらくする「ストロンク・ジャパン派」
と、用いままにしておくべきとする「ウ
ィーク・ジャパン派」の対立がGHQ内に
あった。それは今日の米国の米利登と民主
党の対立をめぐり、戦後を境に影を
落としているが、ある時期からGHQの政
策は反共急カーブを切る。

抑留者に大規模なスパイ作戦

GHQは一九四五年の占領後、犯罪者
の捜査を次々進め、投獄中の反戦主義者や社
会主義者を釈放し、軍国主義を根絶する民
主化政策を重視した。しかし、四七年ころ
からGHQはセネストやデモの鎮圧、共産
主義者逮捕、中東非元首相の釈放を
進め、「ストロンク・ジャパン派」の主張が
強まった。

この時期はまさに、東西冷戦の拡大、米
国内における赤狩りと一致しており、GH
Qは対日政策でも、日本赤化の防止に重き
を移したのだ。

当時GHQが最も警戒したのは、ソ連の
日本侵襲であり、洗脳されたシベリア抑留
者が帰国後、日本で社会主義革命を起こす
ことだった。戦後、旧満州を帰国軍人から
シベリアに抑留された日本兵や民間人は推
定六十六万人。四七年から本格化した帰国
では、洗脳された多数の抑留者が「天皇萬
歳萬歳上陸」を叫び、東京・代々木の日本共
産党本部に押し寄せ、入居したものだ。

GHQはそれだけ、抑留者の中にソ連の
スパイが紛れ込んでいることを警戒、日本
全土で大規模なスパイ狩りを進めた。
この作戦のまはしを聞かされた日本軍、
米軍、米公文書館に保存されている。戦後の
日本を舞台に、米ソの大規模な情報、防

さそう各報が展開されていくのである。
抑留者への捜査とスパイ作戦を展開したの
は、GHQの戦後第二部(G2)に属する
第四一防務部(シ-1)で、九
百人で構成。作戦は「プロジェクト・ス
タイアチ(鋭い目)」と呼ばれ、「ソ連のス
パイ分子の捜査と検閲」を目的とした。作
戦は日本を八地域に分けて、総司令部を設
置、地元の警察と協力しながら、抑留選
者の調査・監視を行った。

作戦が「展開した五二年十二月、シ-1
が発表した「プロジェクト・スタイアチ」の
最終文書は、こう報告している。

「シベリア抑留者の帰国が進む中で、ソ
連が帰国者を監視してスパイや破壊分子を日
本に侵入させていることが、シ-1に報告
された。西側と密接に連携するシ-1の
チームは、ソ連が情報収集所に民主化中
校や「民主グループ」を組織し、それに
参加しない者の帰国を遅らせていることを
発見止めた。ソ連のスパイ工作を摘発する
ことは、米国の世界での情報活動にも役立
つ」

「シ-1はこの作戦を通じ、抑留帰国者
に対して、延べ百万回の予備捜査を行っ
た。予備捜査は一時間程度で、その中から

Project Stitch

スパイと疑わし人物を「カチコリー」
とみなし、十二日から二十日にわたり、毎
日した。その結果、シ-1はソ連のスパイ、
三百五十二人を検出。うち三百二十八人
がスパイと認定された。このうち三十二人が
帰国後、ソ連当局から賞状に授けられた
ことを認めた。

「プロジェクト・スタイアチ」の目的は、①
ソ連のスパイや破壊工作員の捜査、②帰国
するスパイ、工作員の検閲、③スパイや工
作員の無力化、④ソ連のスパイ活動の監視に
関する情報入手、⑤その他、ソ連に関する情報入
手や情報提供、⑥活動への対応策など
の五点にある。この作戦は、帰国が終わり
かけた五〇年ころには大きな成功を収め
た。

冷戦期間において改めて拘束

GHQがシベリア抑留帰国者の帰国を管
理していたことは知られているが、全面的
な捜査作戦の内容が明らかになったのは初めて。
公文書には、抑留者リストや帰国記録、
ソ連各地の収容所の状況、米軍への指令
書など「プロジェクト・スタイアチ」に関
する大量の文書が保存されている。

指令書は、「予備捜査は日本人に当たら

ずともよいが、スパイや自衛隊員間の最終
検閲は日本人に任せよう」となると、
シ-1の米国人捜査員は検閲を怠るよう
指示している。約五百人によつて「カチ
コリー」の検閲者に対しては、うそ発見
率が確保されたことも分かった。

指令書によると、スパイと告げなかつ
たり、検閲しなかった帰国者の帰国者に対
して、シ-1は翌年四月十六日、「冷戦期
間」を重く、検閲を外した印を付した。す
ると、たいていその人物は四〜六カ月後、
ソ連当局と接触したり、スパイ活動を再開
する。シ-1はこのスパイの監視を最重に
重視した上で、再び拘束し、長時間にわた
る検閲を行なったという。

指令書は「この方式は非常に効果があ
り、多くのスパイが活動中止を誓約した
り、二重スパイになっていった」と伝えて
いる。シベリアのラッキー(情報収集)で
ソ連当局にどう偽られてスパイになり、母
国後は米国人にどう偽られる日本人エー
ジエントも、冷戦にもあてはめられた恐れを
覚悟せよといえよう。

大規模な検閲のスパイも百万人以上
に抑留され、各地で監視活動に駆りし
められ、米軍は旧満州でも抑留帰国者を監視

する捜査と工作「プロジェクト・スタイアチ
(鋭い目)」を展開。大量の文書が残っていた。
米ソ冷戦激化の中で、米軍はソ連のエー
ジエントが、前線に侵入する日本、朝鮮に
浸透することを最も危惧していたのだ。

抑留日本兵の検閲に米軍参

シベリア抑留の帰国が一度止めた五二
年、東京五二の検閲「戦はシベリアの抑留
だった」が全国で公開された。シベリアに
抑留された日本兵が、ソ連兵のリンチを受
け、吹雪の中を彷徨せられるこの映画
は、ソ連の抑留生活を暴露した映画だった。
戦後この映画は「米軍参文化文庫」(U
SIA)の資金によって製作された。こ
れも、米公文書によって明らかになった。

GHQ内の「ストロンク・ジャパン派」の
代表格で、サイロとIG2(少将)が
映画製作を推進、当時米政府内で検閲され
た対日心理戦に絡んで、英米情報界が参
った。当時は松川事件、白鳥事件など、地下
闘争に絡じた米軍参員が検閲したというわ
ろれた米軍参員の名を付した事件が顕著な
時期。プロジェクト・スタイアチと併せて、映
画製作もGHQの反共急カーブを走ら
せた。

(一)